開通褒斜道刻石

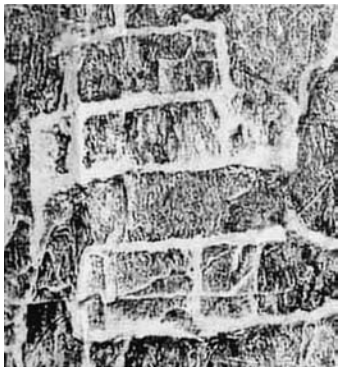
永平9年(66)
(後漢時代)

雄大な摩崖刻石①

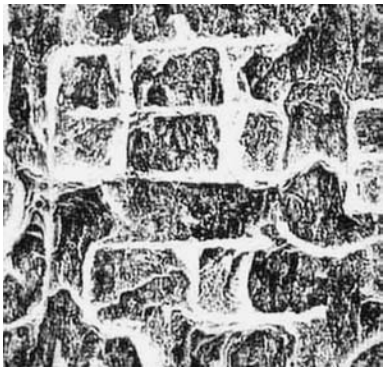
木雞

木雞室
伊藤　滋

図版②「鹿」字



旧い拓本



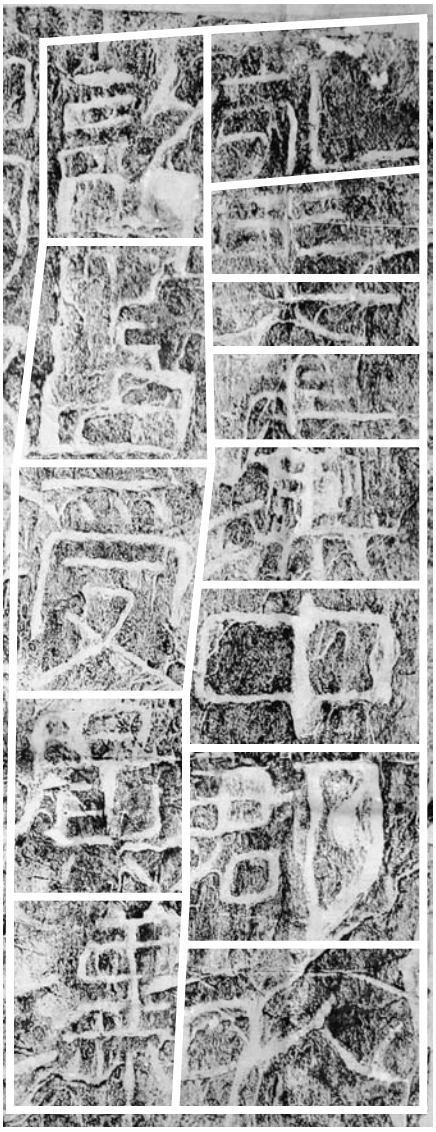
刻し直した後の拓本

この摩崖刻石は縦120センチ横280センチほどの横長である。一字の大きさは最も大きいもので縦18センチ横16センチ、小さいもので縦5センチ横13センチほどであり、大きい文字は小さいものの三倍ほどになる。全体で十六行からなり、一行あたりの字数は五字から十二字まで各行により異なる。碑文の内容は、道路を完成させた時の紀念としてその経緯を記す。長年にわたり風雨にさらされてきたために岩面がもろくなり、文字を写すために拓本をとるにつれて岩面が薄く、少しずつ剥がれ落ち（図④）、次第に文字が見えなくなった部分もある。その後、一部の見えなくなった摩崖の文字を改めて刻した。刻し直した後の拓本とそれ以前の古い拓本では一部に大きな違いが生じた（図②）。そのために旧い拓本が尊重される。書風は古い隷書体に属することから「古隷」（これい）体と呼ばれている。漢時代後期に隆盛を極める美しい波磔を具えた「八分隷」とはやや異なる。文字の布置は、文字の上下・左右の間隔を取らず、文字の構成に従い自由である。全体の章法は後世の碑文のように整然としたものではない（図③）。その効果によるのであろうか、実に伸び伸びとして力強い趣を示している。

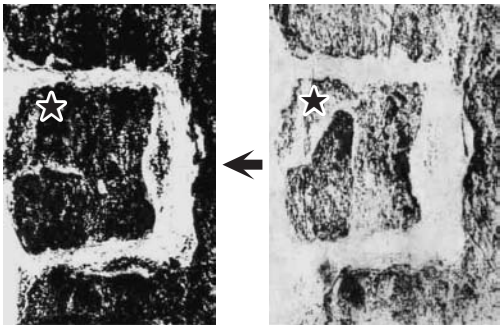
次回は、『楊淮表紀』です。この欄に関するご批評、ご意見、ご希望、ご質問などをお聞かせください。私宛に直接メールで、また編集部宛にお送りただければ幸いです。

伊藤　滋　メールアドレス　mokkei@galaxy.ocn.ne.jp

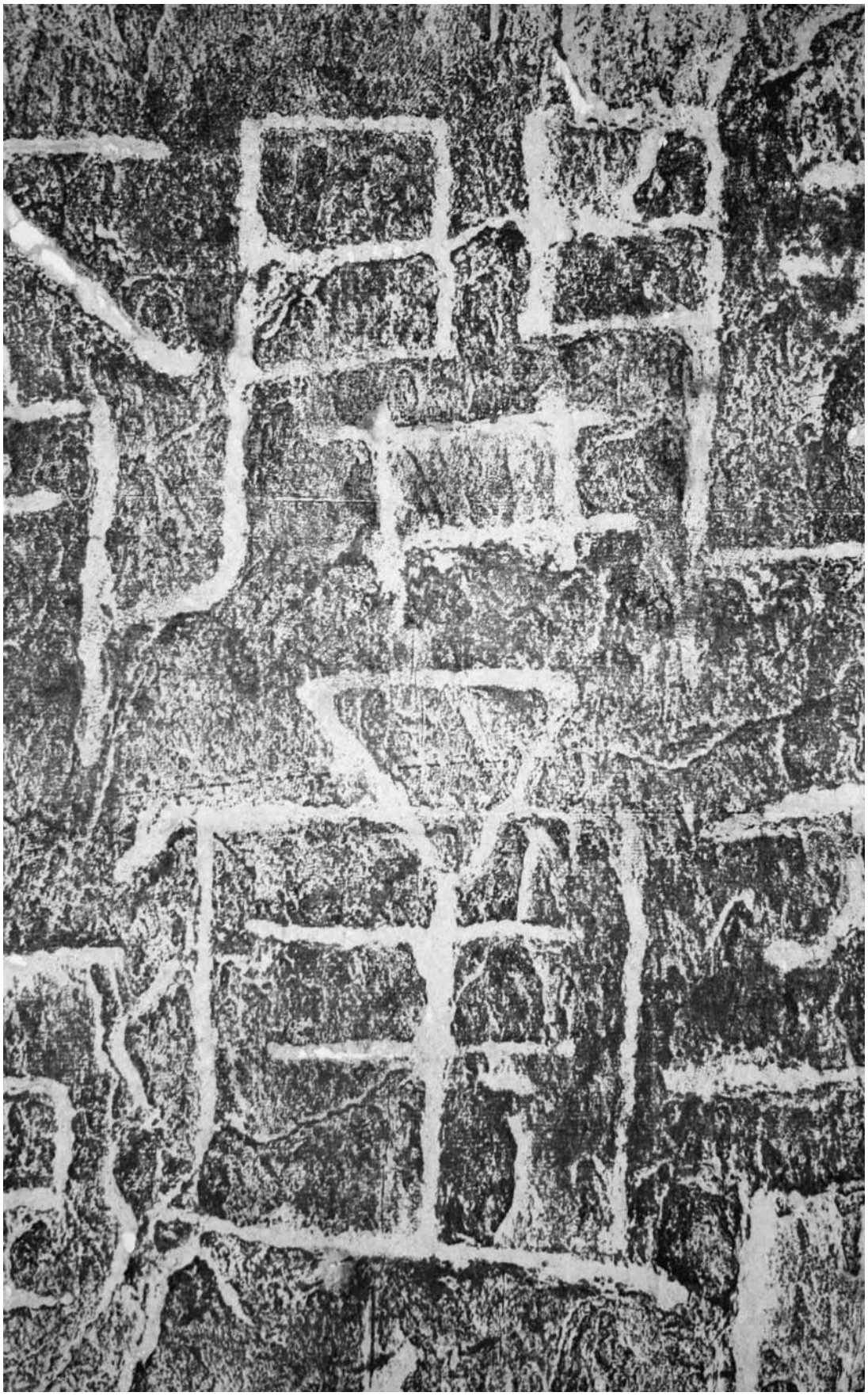
図版③ 文字の大きさと章法



図版④　摩崖岩面の表皮★が剥落



図版①「開通」の二字（やや縮小）



書道芸術院
平成の群像（2011）

「足による」

2007　第13回長野県現代書藝展　文部科学大臣賞受賞作品

山口仙草

「私と書道」

「書」を本格的に始めて40年が経過しようとしています。成田高校で恩師である、板垣洞仙先生とめぐり会って以来、今日までずっとお世話になっています。小さいころから字を書くことが単に好きで始めた書道でしたが、人生の中でここまで「書」というものに影響されるとは思いもしませんでした。

普段の練習は古典の研究が主ですが、展覧会への出品は、昭和46年の第24回書道芸術院展からで、そのころは臨書部があり、臨書作品を出品しておりました。その後は前衛作品を出品しております。

最初の頃は墨を濃く磨ることに心がけ、超濃墨で真っ黒い作品ばかりを制作していた事を覚えています。次には、ブラックカーボンの時代、そして現在の淡墨の時代へと変わってきています。淡墨の魅力は墨色にあります。膠が枯れてくると伸びのある深く美しい線を表現することができます。墨の作り方もいろいろありますが、淡墨の発墨は文房四宝のどれをとっても違い、そのときのタイミング、それぞれのバランスが微妙に絡み合ったときに現れます。それゆえ時間をかけひたすら待ち続け、古墨の宿墨を使うことで私なりの書の世界を築いてきたつもりです。

書は文字を素材としての形象活動であり、技術力・生命力及び精神性が作品から発せられる、書表現を求め頑張りたいと思います。人生の節目である還暦を迎え、振り返ると改めて書を通して様々な出会いがあり、温かい指導や助言をいただき感謝しています。これからも様々なことに関心を持ち、自分の書の世界を広げ、新しい前衛書の創造を目指し邁進してまいりたいと思っています。

書のひろば

理事長　辻元大雲

第63回毎日書道展開幕

3月11日の東日本大震災の影響がどの位なのか心配された第63回展は、既報のとおり搬入数減も当初予想より少なく、ほぼ例年並みの規模で開催された。5月の鑑別、6月の審査、会員賞・文部科学大臣賞選考も順調に進み、7月6日午後から国立新美術館にて盛大に開幕した。

主な内容を取り上げてみると

○特別展「宇野雪村の美」

59回展の「金子鴎亭の書」から5回目となる企画展はやはり圧巻、前衛書のパイオニアとしてばかりでなく、文物コレクション、鑑識眼の幅広さなど多方面での業績を目の当たりにして感激一入である。会場では多くの参観者の眼を惹きつけている。

○表彰式・祝賀会

7月12日今回より新しく会場をプリンスタワーホテル東京のコンベンションホールに移し、広大な会場は祝賀ムードに包まれた。当日午前には来年3月フランスパリで開催予定の国立ギメ東洋美術館ジャック・ジエス館長が「いま、なぜ毎日書道なのか」と題して講演、主として宇野雪村展を取り上げながら毎日書道展作家の魅力を語った。

午後、2000名を超す参列者のもと、晴れの表彰式が文化庁長官はじめご来賓ご臨席のもと盛大に執り行われた。式冒頭には本院常務理事下谷洋子氏ら3名に毎日書道顕彰授与が行われた。

記念撮影の後、会場を移して祝賀会が喜びの受賞者を中心に和やかに行われた。

○書道芸術院出品者懇親会

同日午後5時過ぎより、芝パークホテルにて200名余の院関係者による出品者懇親会が、下谷洋子毎日書道顕彰、会員賞に輝いた佐藤莱扇、倉林紅瑶お二人はじめ各部入賞者を囲みにぎやかに行われた。

役員紹介・恩地春洋先生あいさつ

第63回全国学生書道展開催

都美改修の関係で昨年の奈良会場に続き、当初仙台メディアテークで開催予定であったが、東日本大震災の影響で会場使用が危ぶまれたため、急きょ東京都立産業貿易センター浜松町館に会場を移動して開催することになった。7月29日から8月2日までの会期で、7月29日には表彰式が行われ、財団法人書道芸術院理事の先生方に賞状授与をご担当いただいた。

本展は次回展より2月開催の書道芸術院展にて併催されることが決まっており、主催も(財)書道芸術院となり募集内容も半切½、半切条幅部門を設けるなど大きく変更される。今後理事会などで検討の上、詳細が決定することになっている。

「空海と密教美術展」開催

東京国立博物館平成館にて7月20日から9月25日の間、特別展として開催される。空海は皆様よく御存じだと思うが、全体像を見る機会はあまりないと思う。

本展は4章構成で、空海とゆかりの密教美術を展覧する。是非ご高覧を。

○観覧料　一般1500円

○主な書道関係展示物

聾瞽指帰　上巻7／20～8／21

下巻8／23～9／25

灌頂記　7／20～8／21

風信帖　8／23～9／25

「孫文と梅谷庄吉 ―誰モ見テイナイ写真」

同じく東京国立博物館本館にて特別展として開催される。100年前の日本と中国をテーマに孫文が中心的な役割を果たした辛亥革命（1911）から100年の節目の年に、孫文と梅谷庄吉、そして彼らと密接にかかわった人々やゆかりの地を当時の生の資料で紹介する。空海展と併せご高覧下さい。

○会期　7月26日～9月4日

○観覧料　一般800円

尾形鼎山、新藤翠吟両先生ご逝去

本院東北総局及び宮城野書人会の運営発展にご尽力されたお二人が相次いでご逝去されました。誠に痛恨、残念であります。心よりご冥福をお祈りいたします。

尾形鼎山（本名　侃）

平成23年6月30日ご逝去　81歳

新藤翠吟（本名　友子）

平成23年7月4日ご逝去　88歳

予告　書道芸術院講演会講師決定

恒例の院創立記念日（11月23日）講演会の講師が決定した。

講師　張麗玲女史（1967年生）

中華人民共和国・浙江省出身の元女優。CS放送大富社長で、日中両国でプロデューサーとして活躍。（詳細後日）

21世紀の書
―私の主張―

現代詩文書 (五)

佐藤無極

第40回書道芸術院展前後より主に濃墨にての作品でいろいろな傾向のものを発表してきたつもりでしたが、本当に多岐に渡っていたかどうかはすこし疑いが残ります。

掲載作品は第58回書道芸術院展出品作で、石川啄木詩「我を愛する歌」の一節です。余白を美しく、白は白らしく明るく、また潤渇の減り張り、そしていかに融合させるか、また時に渇筆の透明度をいかに高めるかにかかっているものと考えて書いたものです。それがうまく表現できているかどうかはなはだ疑問ですが、いかがでしょうか。

詩文書は自由で多種多様であり定った方法、法則があってはならないものと思っています。もし、こうであらねばならない、などという法則などがあるとするならば現代詩文書ではないと思います。

詩文書は自由ではありますが、詩歌を表現するためには技量を要し、常の習錬、人格の形成が重要と思います。

詩文書は書く側は自由であると同時に観る側も自由であるのではと私は思っていますので、書く側の多言は要さず、見る側の自由裁量に委ねられて然るべきだと思っておりますが、いかがでしょうか。

第58回書道芸術院展出品　佐藤無極書

かな (五)

大辻多希子

今から10年近く前、毎日新聞の日曜版に、武田信玄の百首和歌集について掲載があり、和歌二首が紹介されていた。武人である信玄公の歌に興味を感じ、知人に話したところ、甲府の武田神社の宝仏殿に問い合わせて資料を送っていただいた。

〝信玄公〟の和歌は、おおかたは、「古今和歌集」を主流とする勅撰和歌集の影響が色濃く、いうなれば、花鳥風月、雪月花の王朝和歌である。「新古今集」などに比べると、あまり技巧的でなく、信玄公の真実が、まことに素直に流露されている。とあとがきに書かれている。

展覧会では、信玄公の歌の作品は、見た事がなく、人真似ではない自分らしい作品を、この歌に託してみようと考えた。

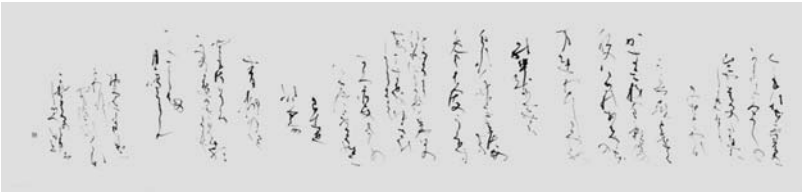
10年近い歳月を、百集和歌の中から小字、中字、大字作品と、信玄公の歌と共に展覧会へ出品を続けた。

2010年10月、東京銀座画廊において、書泉会14人展を開催した。

2尺×8尺を横に七首を選び、加工の強い料紙を使用した。

加工の強い紙に書く事は不慣れなため、紙に気を取られすぎてしまった。筆や墨を換えながら試行錯誤を繰り返したにもかかわらず思い描いていたイメージとは違っていたが、完成はないのだから次の作品に生かせばよい、と師匠の下谷先生はおっしゃってくださった。師の励ましの言葉は何よりの力となって次への活力となる。

この作品を最後に、信玄公の歌から離れようと考えていたが、もう少し、この歌集にこだわり作品創りを楽しみたいと思う。



2010年10月　書泉会14人展出品　大辻多希子書

書話シリーズ 400

『奇蹟への感謝』

利村郁子
（かな部・審査会員）

「迷っていても始まらないから電話してごらんなさい！」と、私の背中を押してくれたのは、やはり母だった。正確な月日は覚えていないが、18年ほど前の6月のとある土曜日だったことだけは記憶に残っている。

『お稽古を始めるのは6月がいい』と言う母の口癖により、私は展覧会の目録を片手に電話の受話器を取っては置いてを繰り返していた。

私の書道との出会いは、遠い記憶になるが小学2年の時だったと思う。私が初めて自分の意思表明をした「お習字習いたい。」の一言を両親は快諾し自宅近くの書道塾を探し、姉と一緒にお稽古に通わせてくれた。

なぜ、お習字が習いたかったのかは、自分でもよくわからないが、習いたての頃は心の開放感を感じていたような気もする。私が書いた習字を見て母は「この字は何で書いてきたの！まるで箒で書いてきたような字ね！」と半紙に整然と書く姉の習字と比較し、いつも驚きを隠しきれずにいた。

母はよほど私の習字が心配だったようで、先生に相談したが、当時の師は「型にはまらないこういう字を書けることは伸びる証拠だから安心して！」と助言し、私の書道への心の芽を大切に育ててくれたのだと、今でも感謝している。

いつしか奔放な書は書けなくなってしまったが、10代の頃は時間を忘れて取り組める書道がとても好きで、書家に憧れていた。しかし現実は厳しく、10代後半から20代前半にかけて書道と決別した時期もあった。『二度と筆は持たない！』と心に誓ったが、就職後に大きな挫折を経験し、私が自分らしく生きるために必要なものを考えた時、書道にたどり着いた。

数年間のブランクは埋めることができないほど大きなものに思えたが、また幼い頃から通っていた書道塾でお稽古を再開した。ところが、その直後に師が病に倒れ、私は路頭に迷うことになる。しかし、一度筆を持たない日々の怖さを経験した私は、職場の通信制書道サークルに参加しながら師の回復を待つ一方、新しい師を求めるべきかどうかを数年間思い悩んだ。

そんな折、書道サークルの展覧会と同じ会場で現在の師の大学時代のお仲間との展覧会が開催されていて、私は、ふと足を止めた。

作品を見た瞬間『これだ！』と心が閃いた。美しいだけでなく、紙面の中で自由に躍動し、何かを語りかけてくるその作品に強い感動を覚え、私は勝手に『この人しかいない！』と確信した。

電話に出たのは、先生のお母様だった。緊張のあまり、私は何を話したのか全く覚えていないが、すぐに電話口に先生の声がした。「もうすぐ前橋に戻るので、9月からお稽古にいらっしゃい。」と言われ、夢を見ているような気持ちで電話を切った。

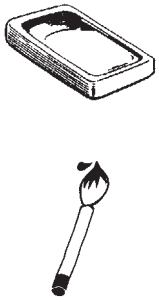
下谷洋子先生との出逢いで、私の生活は一変した。毎日が忙しくなり、先生のお手本をいただいて作品を書くことが楽しくて、お休みの日は一日中、書道三昧の生活を楽しんだ。生活のすべてが書道に結びついていたような気さえする。

実は先生と出逢う前、私は生きる意味を見出せず、何も信じられなくなっていた。だから、あの時母は、より強く後押ししてくれたようにも思える。そんな私を前向きに生きられるように導いてくれたのは師匠と書道だった。迷う私に先生は『書は決して裏切らない！やればやっただけのことが自分に返ってくるのが書道よ！』と教えてくれた。自分の努力が報われる書道は、私にとって、かけがえのないものに思えた。

どんなに拙い作品であっても、私と共に歩んできた作品たちは、悲しみも喜びもすべてを包み込む自分史のようなものである。その時代の歌と同じように、私の作品たちも、その当時の私の想いを映し出している。5年前、あんなに辛かった父の死も書道と共に乗り越えた気がする。決して順風満帆な書道人生とは言えないが私にはなくてはならない書道である。

あの日から、私の書が急速に進歩したとは思えないが、いつの日か、紙面で自然な自分の呼吸を感じられる作品が書けるようになることが夢である。

いろいろな偶然が重なり合って巡り逢えた下谷洋子先生と今でも温かく見守り続けてくれる母に感謝し、これからも新たな作品と真摯に向き合って行ける自分でありたいと心から思う。



㉛⑤

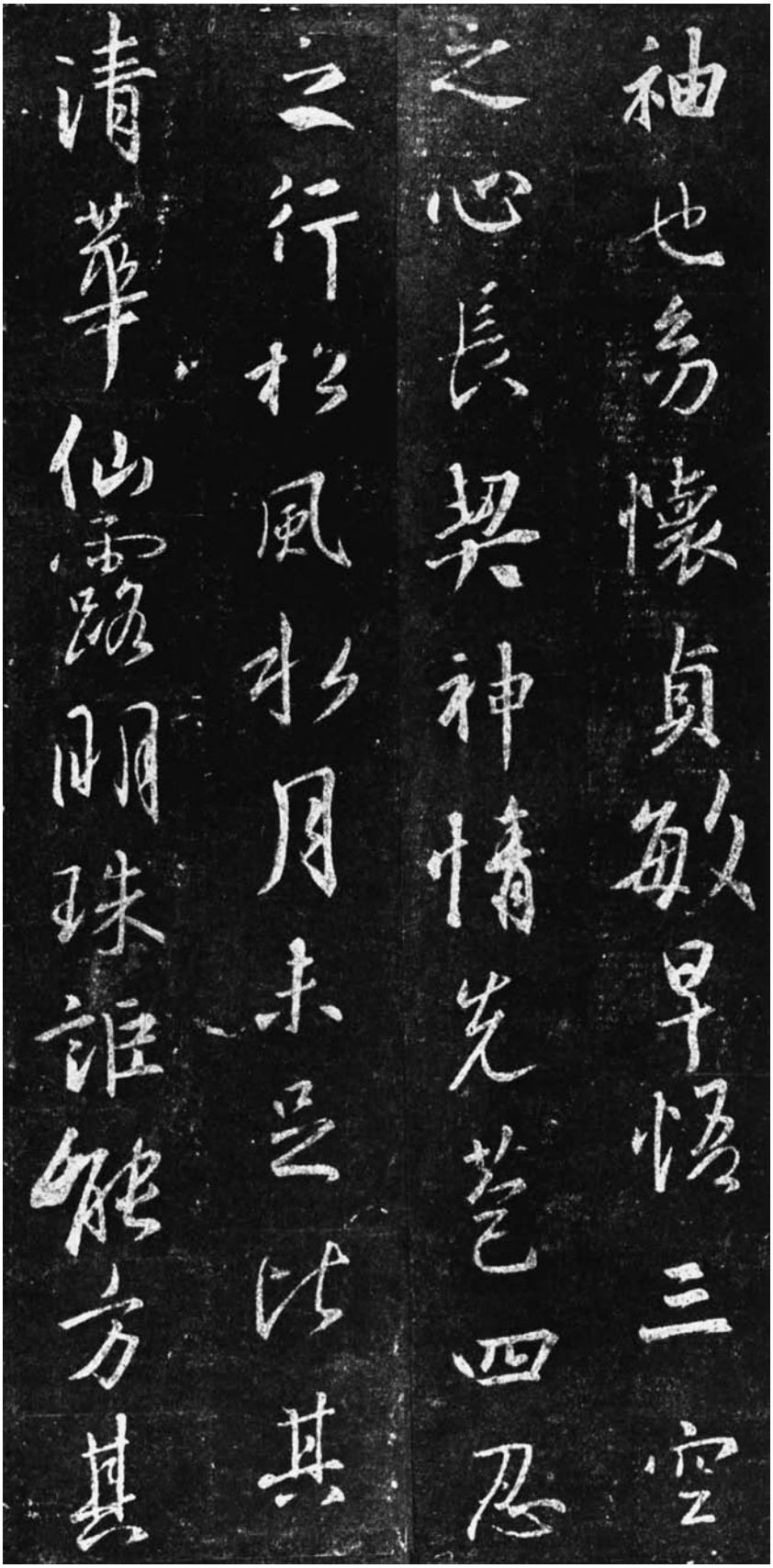
漢字研究部

集字（王）聖教序（東晋・王羲之）②

用紙　半紙普通判　左の法帖の中から何文字臨書してもよい。（掲載部分以外は不可）

特別研究部臨書課題　＝（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）左記の掲載以外も可

※落款を必ず入れる
署名、もしくは
○○臨
（押印のみも可）



袖也。幼懷二貞敏一。早悟二三空之心一。長契二神情一。先苞二四忍之行一。松風水月。未レ足レ比二其清華一。仙露明珠。詎能方二其

〈解説〉　この碑は集字のため、全体に統一感に欠けることは否めない。楷書に近い硬い感じの行書、草書に近い柔らかい行書、簡素な字から続け書きの複雑なものまで多種多様で、不自然な箇所が随所に見られ、気脈の貫通も乏しい。しかし、この不調和こそ最大の特徴であり、それが逆に、精彩を放ち魅力になっている。

㊾ かな研究部　針　切（伝 藤原行成筆）②

特別研究部臨書課題　＝（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）左記の掲載以外も可

＝注＝かな研究部競書作品は、上の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。（全臨も可）

用紙

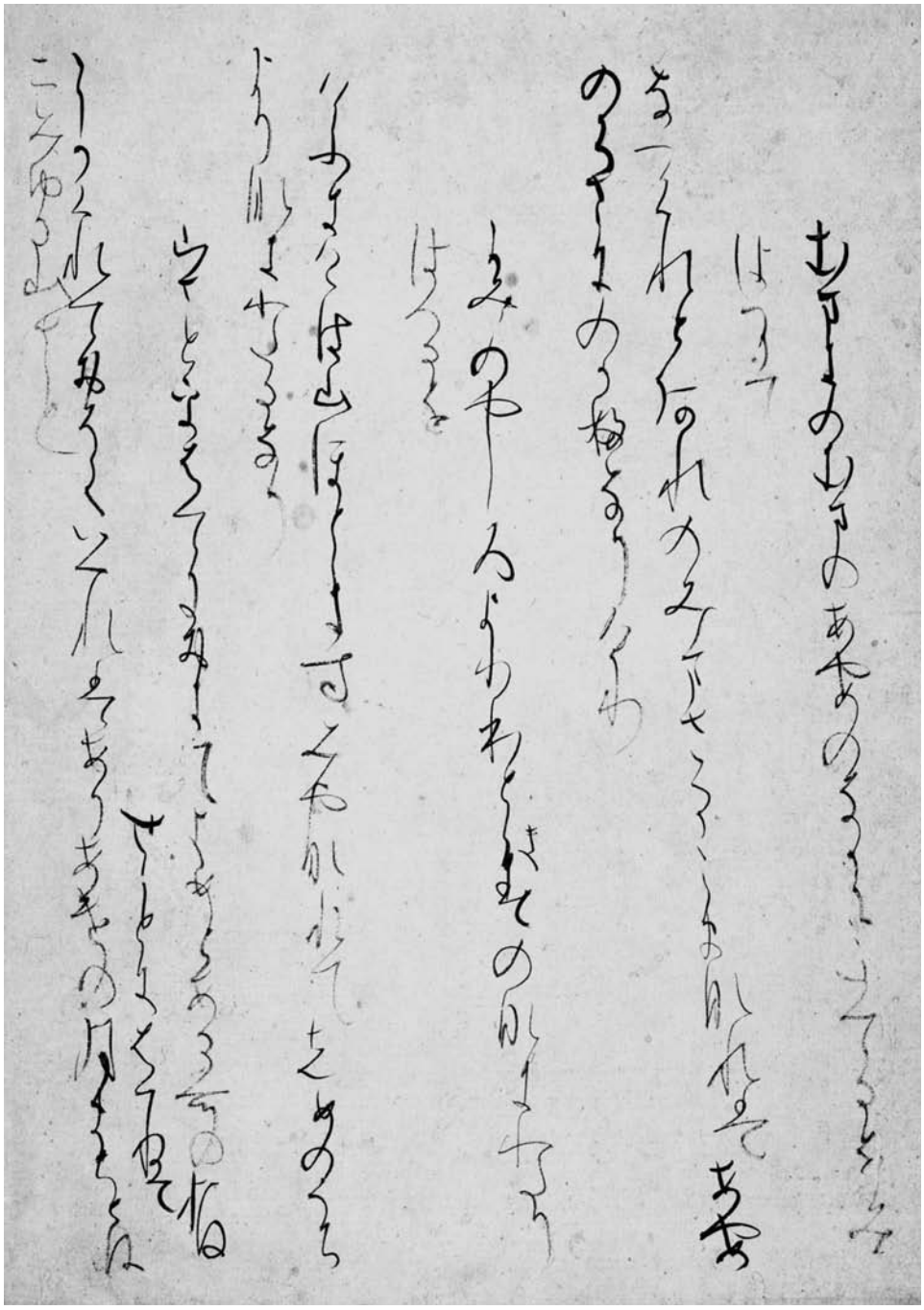
・半紙普通判（料紙可）

〈たて長に使用〉

※今月より別紙を裁断して貼付も可。

・半懐紙は、半紙サイズに切って使用のこと。

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨（押印のみも可）



〈解説〉

針切は、流麗で自由なリズムが魅力となっている。関戸本古今集や寸松庵色紙と同系統とされているが、関戸本のように多様で高度な技法が駆使されていないので、親しみやすくもある。ただ、余白を生かした大胆な動き、曲線よりもこきざみな直線の連続など、学ぶべき要素は多い。「重之の子の僧の集」より

〈よみ〉

むまきのむまの、あやめのな（奈）
かにたてるを、み（可尓多）
はべりて（久阿）
なつくれどあれのみまさるこまな（奈万那）
ればあやめ（盤）
のくさにのがふなりけり（久尓可婦奈介利）
かみのやしろより、ほとゝぎ（可利本支）
すのなきわたり（春那支多）
はべるを
けふきけば山ほとゝぎすみやなれ（介支介支那）
てしめのうち（志可）
よりなきわたるなり（那支多奈）
山ざとをはてにおきてよめと、（乎者尓支）
ある所のおほ（於保）
せごとにはべれば（尓者盤）
こがくれておそくいづれば（可久曽久盤）
けの月まちどほ（遠保）
にみゆる山ざと（ニ）

漢字規定　初段以上【九月十五日締めきり】用紙　半紙普通判

大野祥雲選書

白雲無盡時　よみ（白雲尽くる時なし）

書体＝自由

習い方解説（五）

大野祥雲

白雲無盡時　（王維）
（白雲は永久につきることがない）

「白」第一画は点のようになったが、楽な気持ちで縦画へ進み、息永く転じていく。内部に白をとる。

「雲」宀冠を大きく豊かにし、内部に白をとる。その後、筆の動きを引締め、気脈によって無へ進む。

「無」造形は雲と似ているが、まず横画を伸びやかに書き、上部は細線とし、下部はむすびによって雲と異なる。

「盡」上、中、下部の左右への広がり、それぞれの点画の変化。これらが自然に生まれるようになるとよいのだが…。

「時」尽から一気に偏へ入り、外形は細いが力強く。転じて旁となり、最終画の縦画で収める。

漢字規定 秀級以下【九月十五日締めきり】用紙 半紙普通判

小竹石雲選書

仰不愧天　よみ（仰ぎて天に愧ず）

書体＝楷書

習い方解説（五）

小竹石雲

仰不愧天（孟子）
（自分自身の行動にやましいことが一つもない）

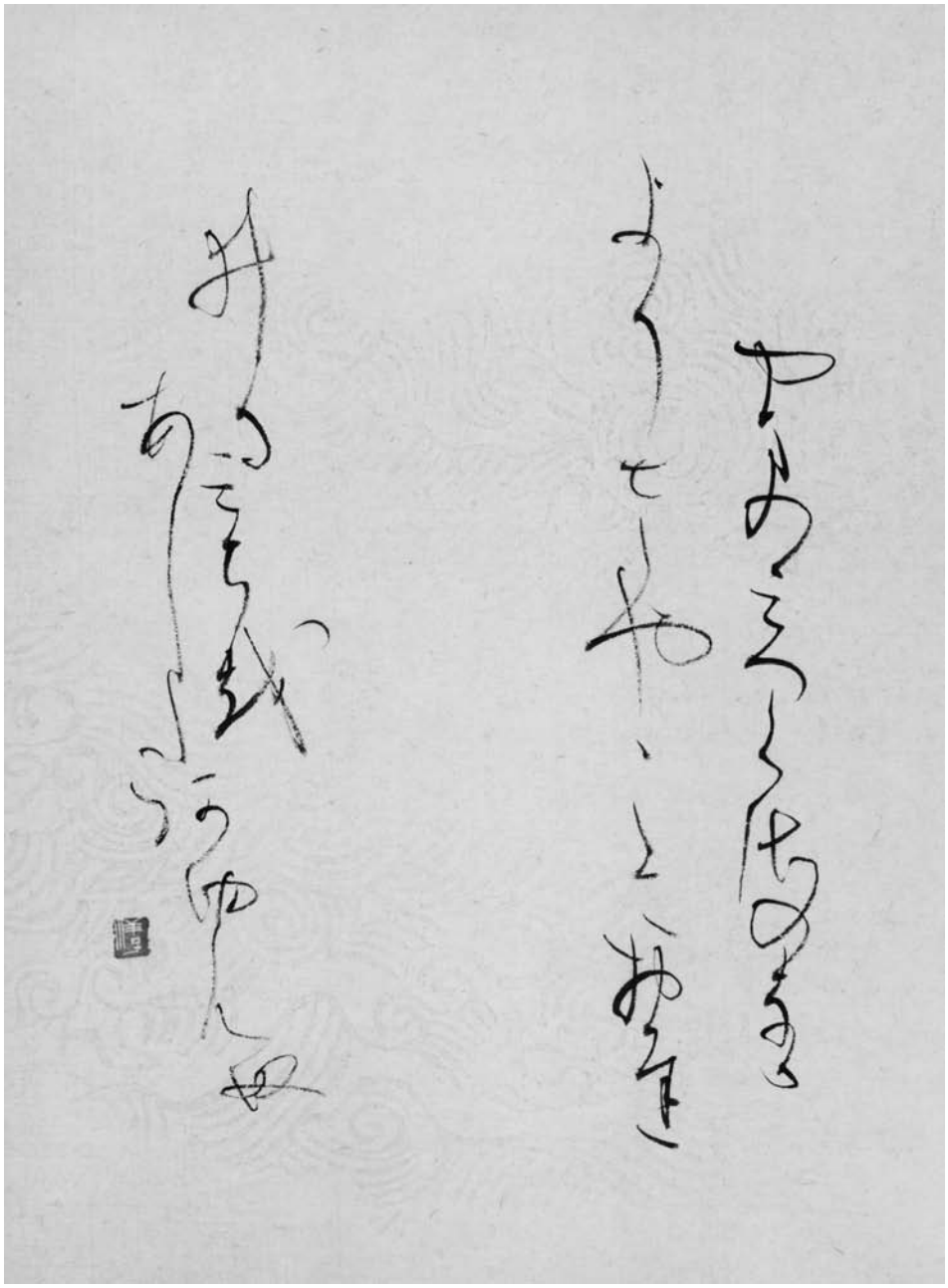
顔真卿の剛直で骨っ節の強く豊かな堂々とした書風を参考に書いてみました。

清濁なんでもぐっと呑み込む太っ腹な人柄が魅力的です。一般には縦長ですが向勢に構えて懐広く筆太に書かれています。王羲之以来の貴族的な書風が破られ、新興の書風が生まれたといわれています。

筆の弾力を十分生かし、運筆途中にたわみとふくらみをもたせるように書いてみました。あまり重心が下がると重苦しくなります。下半では上半で開いた筆鋒を、むしろまとめてゆく気持ちが必要です。

かな規定　初段以上【九月十五日締めきり】　用紙　半紙普通判（料紙可）

下谷洋子選書



よみ方　やま(万)のみ(三)づく(久)さ(佐)のな(奈)か(可)よりさやゝゝ(さや)
に(二)おち(遅)居(井)るみ(三)ちを(越)あした(多)あ(阿)ゆむ(无)も(母)

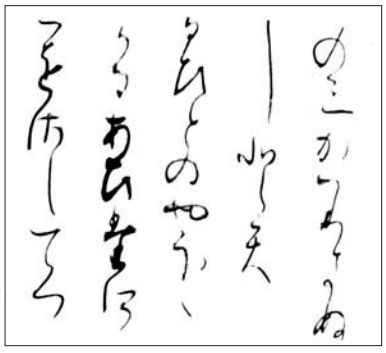
創作

習い方解説　(五)

下谷洋子

山の水草の中よりさやさやに
落ち居る道を　朝歩むも
（土屋文明）

古筆の何行かを一つの面として見ると、各行の墨量は決して同じではありません。創作するにあたっては、墨色の変化も重要で、それによってかなの動きはより鮮明に、立体的な景色になって生命感が現れます。渇筆では筆を充分おろし、筆先の弾力を感じながら急がず細やかに、特に終筆は鋒先をまとめあげるつもりで。今回は、小島切を少々取り入れてみました。



「関戸本古今集より」

かな規定　秀級以下　【九月十五日締めきり】　用紙　半紙タテ1/2（料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

掲載写真のうたを全臨、または部分（二字以上の連綿）を臨書する。

高野切第三種
（掲載写真縮小93％）

よみ方　み(美)はす(春)てつ(徒)こゝろをだ(多)にもはふら
さじつひに(尓)はいか(可)ゞな(那)るとしるべく(久)

かな条幅規定　【九月十五日締めきり】　用紙　小画仙紙半切（料紙可）

平川峰子選書

よみ方　名に(尓)し(志)おは(者)ゝいさことと(東)は(盤)む(ん)都鳥
わ(王)が(可)お(於)もふ(布)人は(八)あ(阿)りやな(奈)しや(屋)と(登)

創作

出品券貼付位置

習い方解説 (二)

平川峰子

名にしおはばいざ言問はむみやこ鳥我が思ふ人はありやなしやと
（在原業平・古今和歌集）

そのような名を持っているのならば、さあ聞いてみようか、都鳥よ、私が思う人は元気かどうかと。都鳥はユリカモメと言われています。634メートルに達した東京スカイツリーは2012年春開業予定ですが東武線業平橋駅が「とうきょうスカイツリー駅」に改称されます。墨つぎと行間の余白に気を付けて制作してください。

※よこ形式に限る

漢字条幅規定　初段以上【九月十五日締めきり】　用紙　小画仙紙半切

名越蒼竹選書

垂綏飲清露　流響出疎桐　居高声自遠　非是藉秋風
（垂綏して清露を飲み、流響疎桐より出づ　高きに居れば声自ら遠く、是れ秋風を藉るに非ず）

書体＝自由

習い方解説（五）

名越蒼竹

全て草書で書くのは案外難しいものです。画数をかなり省略しているため、疎密の変化をつけにくく、またほんのわずかな違いで別字となってしまう危険性もあるからです。そこでこれまでは七言二句を書いてきましたが、五言絶句にしてみました。書く前に書体字典で一つ一つの文字の草書体を確認しておくことが肝要です。

漢字条幅規定　秀級以下【九月十五日締めきり】　用紙　小画仙紙半切

種谷萬城選書

少年易老學難成　一寸光陰不可輕
（少年老い易く学成り難し　一寸の光陰軽んず可からず）

朱熹

書体＝自由

習い方解説（五）

種谷萬城

若い時はあっという間、何時しか年を取り、学問はなかなか成就しない。だから、僅かな時間も疎かにしてはならない。宋・朱熹の語です。今月は、集字聖教序を倣書しました。行書学習で必須の基本的な古典です。原本を確りと鑑賞・臨書し、王羲之の正統な行書書法を会得しましょう。

ペン字規定【九月十五日締めきり】

上柳佳規選書

われ　石と鉄の建物のあいまに
何やらん花の白きを見たり
物すごき花の心なるかな
鉄と石とのあいまに咲き輝けり

室生犀星「夏花」　佳規かく

用紙＝はがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体＝自由

習い方解説 (五)

上柳佳規

地球温暖化対策や、暑さ凌ぎに朝顔や、ゴーヤ、ヘチマなどの緑のカーテン、屋上庭園の造園。環境美化を兼ねた街路樹、花壇の設置など都市の緑化が進められてきました。

この夏は、6月末の記録的な暑さが猛暑を予測させます。加えて、東日本大震災による福島原子力発電所の事故は、原発そのものの安全確保につながり節電を余儀無くされています。

詩「夏花」は、ビル街のどこかで、石と鉄の合間に咲く白い花を見た。驚くべき生命の営み、美の営みである。犀星はそれを「物すごき花の心」と言ったが、やがて秋口ともなれば、コオロギなどの秋虫の声も聞くこともできたろう。そんなふうに、いかにしても絶滅されない「純粋自然」というべきものが、今も都会のあちこちに点在している。と。

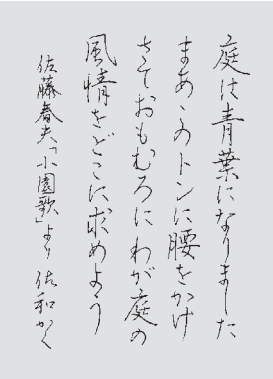
灼熱の炎天下、生命の驚くべき営みのこの白い花は、粘り強く継続することが何より大事だと、私に教えているようです。

（新かなづかいによりました）

※落款を必ず入れる。
（自分の名前を入れること）

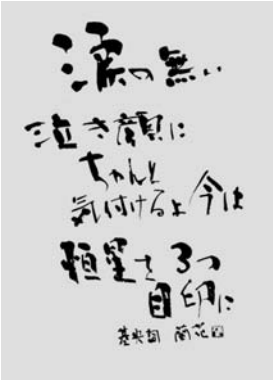
今月のホープ作品 各部総評 NO.602

ペン字部　師範　沖　佐和子
丁寧さに暢やかな筆致、巧みな美しい連綿、布置も落款まで見事に決まり安定感のある格調高い作。
◎ペン字部総評　魅力ある良い作品が多く良い傾向。字形、連綿が美しく光るのは日頃の古典の研鑽の賜物、益々の研究を。（和楓評）



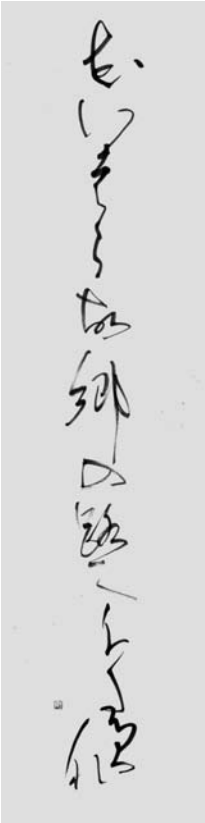
漢字条幅部　師範　東　花子
ねばり強い筆致で書きおろすリズムが魅力的。気迫と気力のこもる痛快な作である。
◎漢字条幅部総評　参考例を元に書かれる方が多いが、書体書風の違いを巾広く研究し、意欲的な作品に挑戦してほしい。（大雲評）

現代詩文書部　特選　高橋　蘭花
濃墨をしっかり使いこなし弾力のある力強い線を引いている。余白が輝き、横構成の変化もよい。
◎現代詩文書部総評　鍛練された線質で表現したいものです。落款は筆者名を入れる。（鄭雲評）



前衛書部　特選　伊藤　有津
紙面を上手に使い墨の濃渇もうまく合ってバランスの取れた作品です書きすぎないことも大切です。
◎前衛書部総評　多彩な作品が多くなっておりさらに新しい発想の転換に挑戦して下さい。（如水評）

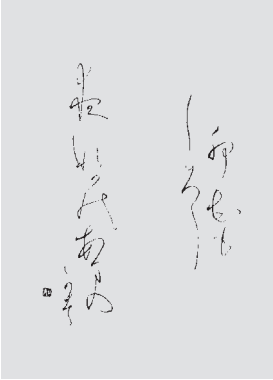
かな条幅部　四段　清水　秀鳳
どのような学習の蓄積の後に、この作品が生まれたのでしょうか。過不足なく格調の高さは美事です。



◎かな条幅部総評　一部墨量過多の人を除き、レベルの高い作品群に接した月でした。故、哉の誤字多く残念。常に確認を。（明子評）

漢字部　師範　大和　星華
濃墨による渇筆が美しく生命感漲る作品。過大とも思われる落款も作品の一部として見ればよい。
◎漢字部総評　秀級以下の手本に楷書の美の多様性を知った人、ここがスタートです。上級者も時に原点に戻ることが大切。（翠風評）

かな部　師範　石橋　知子
まず、基本を踏まえた筆力に注目、粘りと大胆なリズム感が素晴しい。料紙に是非オリジナルを！
◎かな部総評　完成度の高い作が多く、俳句の場合の字の大きさ、太細などかなり把握されて好ましい。料紙の活用を望む。（洋子評）



今月の

特別研究部優秀作品（特選）

現代詩文書（安波）　鈴木英晴

「福士幸次郎詩より」

鈴木英晴書

180×61㎝

◆にじみとかすれの組合せの変化が全体を楽しく見せている。唯かすれの線に筆の動きが少いのでは。（倫子評）

◆骨格の揺ぎない字の詩情あふれる表現を見せられ感動です。安心して鑑賞できる幸せを感謝します。（明子評）

◆二行書は手の内の技か。懐も大きく独自の造形であるがあまりにも全部の字が動き過ぎたか。深く沈む所を。（蒼玄評）

◆なた彫りのような直線をベースに立体感ある表現。終末部やや息切れの感あるが左右の余白が効果的。（大雲評）

前衛書（青蓮）　大町菜円

「夜明け」

大町菜円書

180×61㎝

◆若さを感じさせる気力が伝わります。にじみが和みです。雅印にやや遊びのあるものを使ってみては？（明子評）

◆大きなうねりのある線は見事。にじみ墨色ともによく、特に中心部のにじみは深さがある。印の大きさ一考を。（蒼玄評）

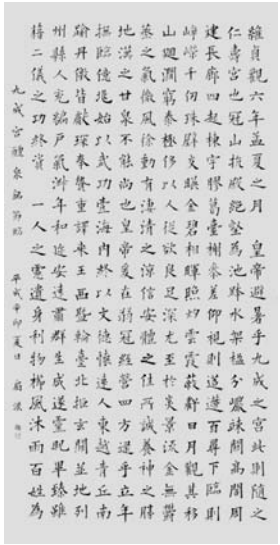
◆潤渇の大胆な変化が大きな動きとなって、観者を魅了するが全体に騒しさを感じる。余白を生かしたい。（大雲評）

◆体力のすべてを当てた感じ迫力が出ている。その反面一寸息をする所があると変化が出てくるのでは。（倫子評）

臨書（墨縁）

田中扇溪

「九成宮醴泉銘」



田中扇溪臨

136×35㎝

◆単純に見ると強さもあり九成宮の雰囲気を感じるが、一字一字の造形にはまだ研究の余地がある。（蒼玄評）

◆中細字を一貫してまとめあげた努力に敬服。所々に墨量の乱れが見られるのが惜しい。さらに研鑽を。（大雲評）

◆形のとり方は実に正確に表現されている。唯これだけのまとまった作品になると墨つぎが大事な要素。（倫子評）

◆偉大なる古典に真摯に向き合う姿勢に敬服です。奥深くに存在するものをさらに探されますよう。（明子評）

漢字（八街）

川嶋里美

「新涼」

川嶋里美書

136×35㎝

◆荒々しいタッチが動きある表情を醸し出し、意欲的な作。もう少しのびやかな艶がほしい。墨色一考。（大雲評）

◆かすれとにじみのバランスが調和よくとれている。墨に色香を漂わせる風情が欲しかった。（倫子評）

◆全力投球の逞しい作品です。立派ですが、じっくり眺めていたい風情から遠いので、一考を望みます。（明子評）

◆破筆を上手に使い白と黒が効果的だ。一行目二行目とも一字目が同一造形なのは少々工夫が必要か。（蒼玄評）

鈴木朝夫書

52×187㎝

かな（志引）

鈴木朝夫

「なつごろもの花」

◆流れるように筆を走らせ、紙面から歌のリズムを感じます。墨色も適当な濃さでその中に変化を表現。（倫子評）

◆行間の置き方が巧みで、リズムのある楽しい作品です。線のしなやかさが響き合い懐の深さがよい。（明子評）

◆最初の書き出し二行に少し甘さを感じるが、それ以降はよどみなく流れ線の切れもある。濃淡も美しい。（蒼玄評）

◆小気味よいリズムで緊張感もあり、技術の高さを見せる。ややまとまりすぎ、もう少し広がりがほしい。（大雲評）

吉田眞理書

35×136㎝

現代詩文書（東実）

吉田眞理

「歩かねばならぬ道」

◆軽やかなリズムで平明な中に滋味ある作。柔らかな線質に気品を感ずる。落款部やや煩瑣か。（大雲評）

◆横線に特に気を使った表現のように見られるが少し多かったのでは。はずむようなリズムを感ずる。（倫子評）

◆詩に寄せる作者の思いが、ひたひたと伝わってくる線の綺麗な上品な作です。視覚の詩を満喫しました。（明子評）

◆細い線が全体を引きしめて緊張感がある。淡々と書き進める中に山場がほしい気がするがそれは好みか。（蒼玄評）

総出品点数 89点

創作の部（63点）
漢字 — 19点
かな — 6点
現代 — 20点
篆刻 — 2点
前衛 — 16点
臨書の部（26点）
漢字 — 23点
かな — 3点

〈特選候補者〉

（創作の部）
「漢字」 華祥 安藤 華祥
墨宣 小林 翠芳
恵雅 板橋 雅邦
「かな」 書泉 岩崎 竹渓
大雲 神谷 雲卿
「現代」 游水 荒川 空華
誠和 石崎 甘雨
うる 今関 心華
「前衛」 秀水 坂井 初江
若葉 工藤 山房
四谷 角田 悠香
〃 木原 尚子
「篆刻」 桂月 平野 草堂
（臨書の部）
「漢字」 三池 佐藤 翠扇
竜泉 小林 洋龍
大雲 池田 沙静
「かな」 うる 川崎 小夜子

漢字研究部
（九成宮醴泉銘）

選評　名越蒼竹

今月のホープ作品

坂井初江

漢字研究部　特選　坂井　初江

字形・章法の良さもさることながら、用筆・運筆が細部にいたるまで正確であり、強い線と爽やかさを表現している。特に謹厳な本課題の楷書を、柔毫によってここまで破綻無く書ききる力量は相当なものと推察される。

◎漢字研究部総評

「楷書の極則」と称される九成宮醴泉銘の臨書は、一点一画のミスによって字形や全体のバランスが崩れてしまう。緊張せざるを得ないが、逆に自分の書と形の比較はしやすく、初歩の人は観察と比較を繰り返してほしい。もっと難しいのは「不即不離」の特徴表現で、点画をくっつけないで、しかも一字の筆脈を通すことであり、一点一画を正確に書いたうえに文字としてまとまっていることが理想である。上級者はこのことを意識してほしい。

香月　知美
蘭雪　洋子
祥良　雲子

翠陽　勤子
晴燁　琴子
翠　由樹美

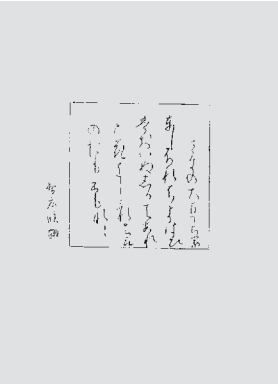
箕城　白杏
啓夫　紀子
桂香　珠光

蒼竹　純平　祥峰
白柳　香耀　清翠
翠芳

かな研究部
（寸松庵色紙）

選評　山藤　美知子

今月のホープ作品



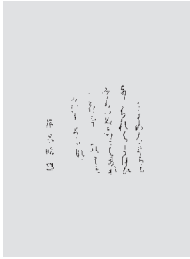
鈴木智広

この古筆の粘りと張力のある強い線円転自在の流れもうまく表現されて、リズミカルな趣きで寸松庵色紙独特の美観がよく書かれ秀作です。

かな研究部　特選　鈴木　智広

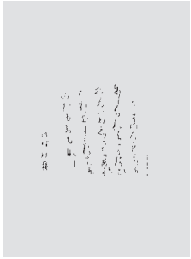
◎かな研究部総評

誤字なく全体的に大変よく出来た作多く見られました。用紙は臨書する上で大変重要です。にじまない、すべりのよい用紙を使用して下さい。

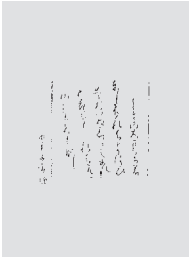


嵐　泉
蓉　道
汀　石

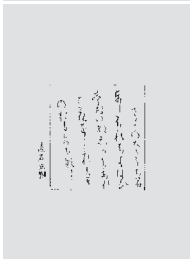
紅　霞
麻　睦
美　子

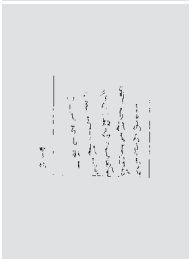


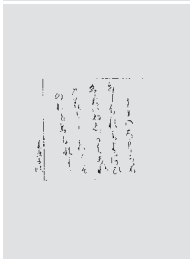
清　美
恵
燈　子　耀
春



由
美
子
三
可
雅
泉







特選

紅瑤　卯月　石習　小松　玉葉　五華　正東　大蒼　た　Aか　竜泉会　東小　正泉　豊田　秀明　椿翠　京橋　玉松　幕張　道翠　泉会　石習　生〃大　もく阪

秀作（60音順）

新井瑛美　京高橋崎　生筑桜葉　千葉　竜泉島　調布張　幕　彩　生筑桜葉　千葉　竜泉島　広　熊谷　木村　北村　岸田　川上　大西　大槻　大石　入井　伊谷　石藤　石渡　新橋　阿井　部　東　青木江理子　花子　春清　知子　廣子　閑窓　翠代　良泉　翠子　惠舟　東三男　一美　幸江　星祥　悠弘　敏花　翠子　径子

入選（60音順）

紅瑤　竜泉　道峰　英月　香峰　う月　生る　樹原　顧大　緑原　Aイ　昆陽　た　枝か　硯苑　水　Nヒ　昌宛　艸玄　清月　あゆ　詢扇　こだ　大雲　大曜　若葉　詢扇　英峰　生水　大阪　蓮紅　広島　梓江　福山　蘭鼎　竹扇　千葉　華祥　青峰　誉田　樹原　春汀　清月　こだ　澄春　艸玄　澄春　竜泉　和平　正華　N華H　上泉　う澄　洞春　高崎書

須田　鈴木　鈴木　鈴木　鈴木　鈴木　新　庄　志柴　宍倉　猿渡　佐藤　佐木　坂々　坂本　小巻　小森　小林　小林　小島　小ふ　高武　黒江　工藤　工藤　北瀬　岸本　菊池　川元　川本　川崎　河岸　神谷　加藤　鹿島　小野　奥山　沖佐　江田　梅原　宇田　植木　宇井　今村　井上　伊藤　伊垣　板田　池高　飯嶋　飯安　新藤　井美　知楊　枝風
香舟　利子　え子　多美　香生　寿子　三郎　咏帥　起子　和良　和子　篁右　香苑　進芳　佐み　麗よ　か苑　嘉江　武子　澄子　み子　玄城　幸穂　山房　香蘭　彩雨　春峡　萩酉　玉蓮　南汀　茶仙　綾美　優子　星扇　雲卿　雅芳　裕子　理絵　翠峰　和子　茂夫　虹祥　春華　如風　楠麗　貴泉　英二　英子　良佑　青鳳　美子　幹生　紫苑　楊風　知枝

選外231名氏名略

芳蘭　道渡　竹遷　千葉　樹原　蓮紅　竹扇　清月　華祥　玄象　竜泉　松村　紅苑　英峰　右田　生山　こだ　生大　梵　澄春　硯水　幕張　白子　生大　書径　蓮紅　森地　澄春　澄子　銚葉　千橋　前州　郷泉　上書　洞歌　秀せ　詢扇　は　北陸　千字　秀歌　洞書　仲玄　倉吉　江龍　卯月　秀歌　立精　春汀　佑希　春汀　有秋　郷州　竜泉　春光　竹扇
吉田　横山　湯本　遊佐　遊村　山和　大崎　山由　守屋　森田　茂木　茂木　村山　村田　村田　宮寺　宮下　三宅　宮内　丸島　松野　牧野　牧野　前田　本船　深堀　深澤　平山　春田　原田　濱谷　濱田　長谷　長谷　野村　永岡　長守　中島　中村　中澤　鶴江　津田　筑井　千田　田原　辰中　武本　宅山　高佳　高都　高花　井橋　喜久　小泉
信溪　翠綾　蘭舟　禮子　一栄　紅雅　炎秀　紀江　桜子　順博　龍芳　翠蘭　真峰　龍萩堂　晴満　瑞美　白弘　幸楊　礼平　翠華　優舟　清子　幸次　美子　大雪　清郎　佳洗　彩月　勝華　恭美　陽子　竹和　川子　久子　陽子　悦詢　一薫　寛水　雅子　よ子　恵子　幸子　宏子　白香　恵子　梢子　光枝　芳子　都子　花泉　久子　小秋

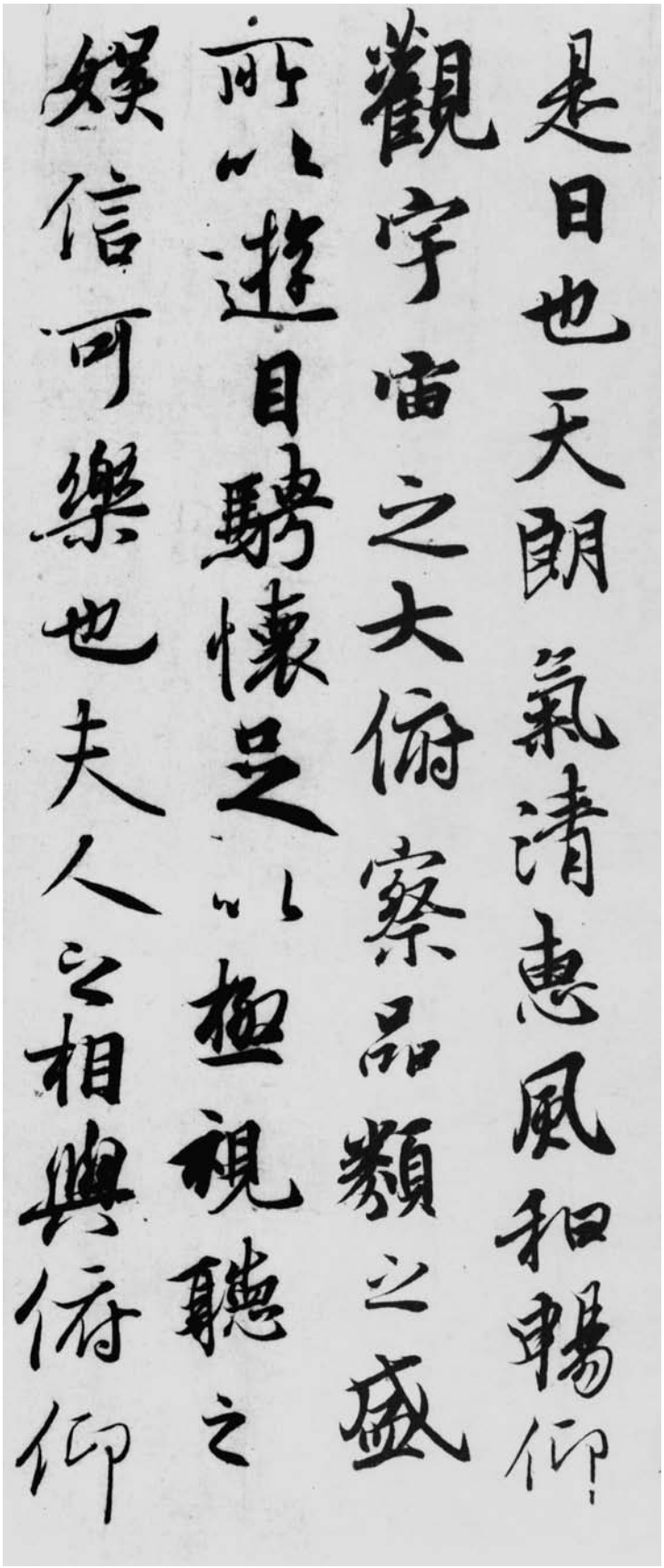
〔特別昇級試験臨書課題〕

高貞碑（楷書）　漢字部　第一種　半紙に写真掲載の中から5字を臨書・それ以外は不可

王・許。龍馬流車。陸／離於陰・鄧。而不下以二

蘇孝慈墓誌銘（楷書）　漢字部　第三種　半紙に写真掲載の中から24字～30字を臨書・それ以外は不可

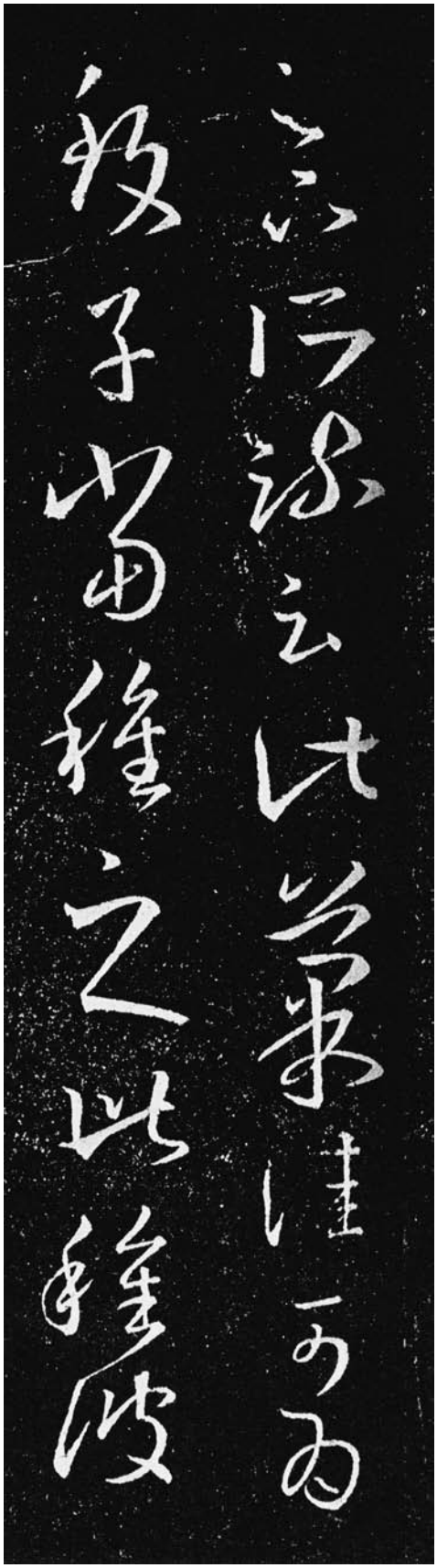
勞二禁衛。頻掌二親兵。慕典。君之／慎密。似二稑侯之純孝。其年重／出躋レ齊。受二天子之命。問二諸侯



是日也。天朗氣清。惠風和暢。仰／觀宇宙之大。俯察品類之盛／所以遊目騁懷。足以極視聽之／娛。信可樂也。夫人之相與俯仰

十七帖（草書）

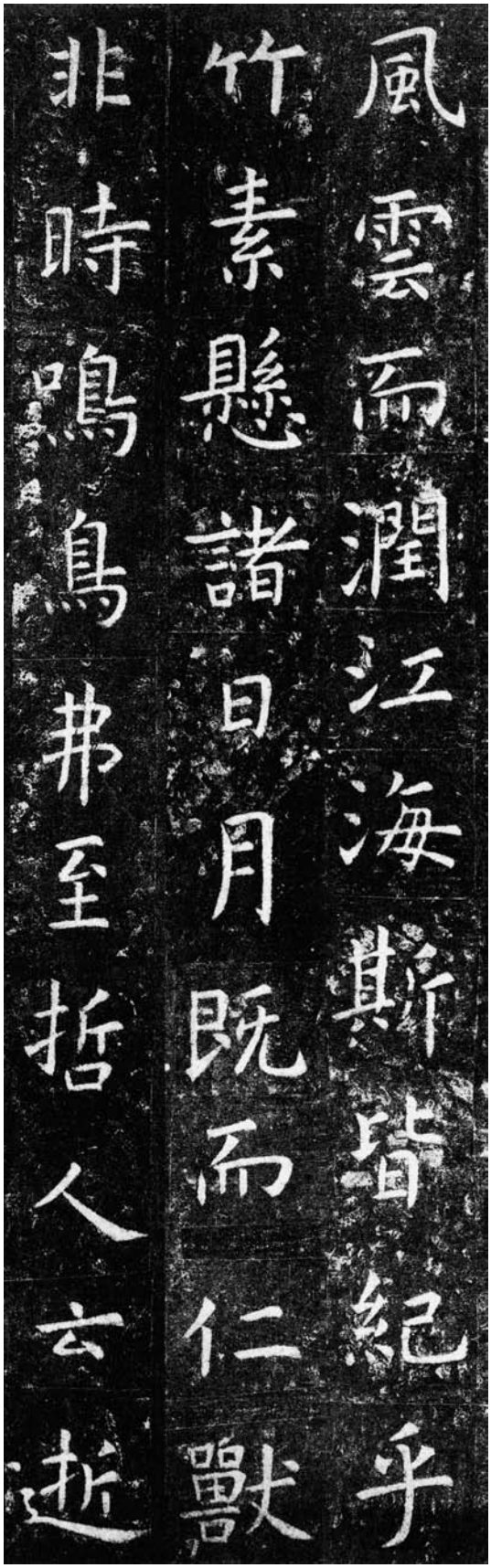
漢字部　第三種　半紙に写真掲載の中から6字を臨書・それ以外は不可



足下所疏云。此菓佳。可爲致子。當種之。此種彼

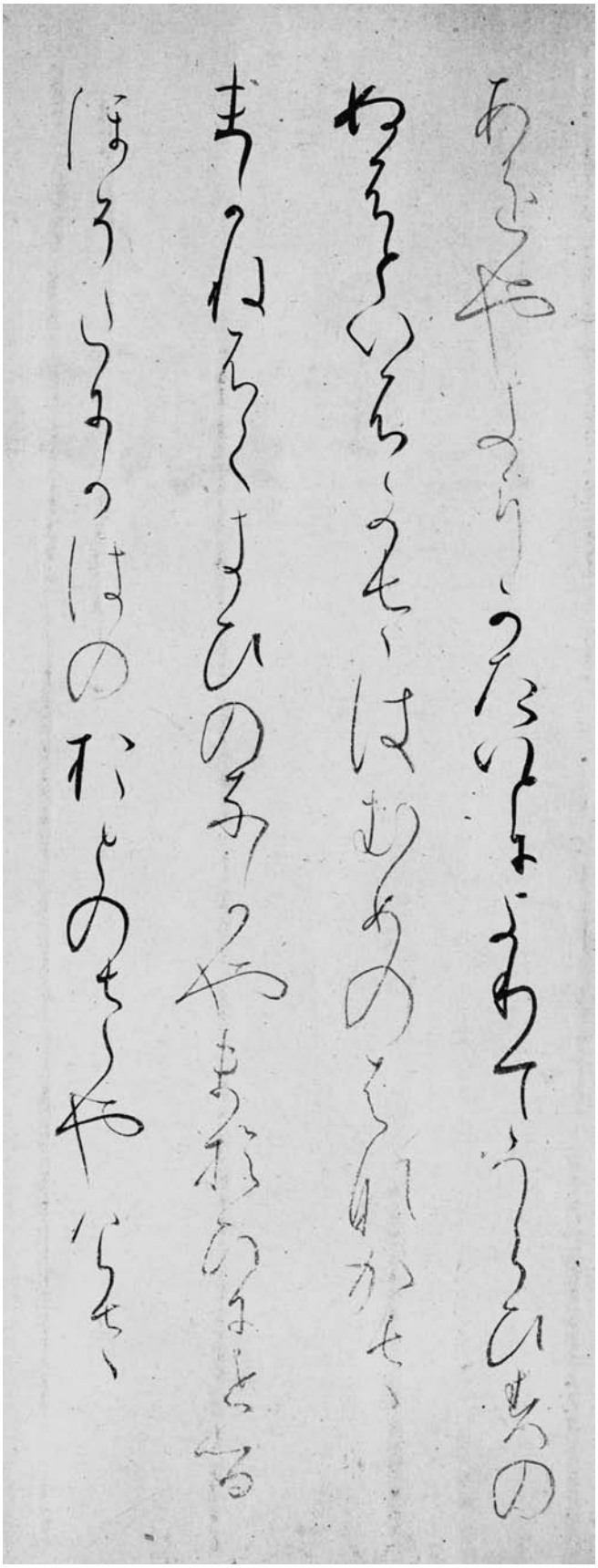
孔子廟堂碑（楷書）

漢字条幅部　第二種　半切に写真掲載の中から14字を臨書・それ以外は不可

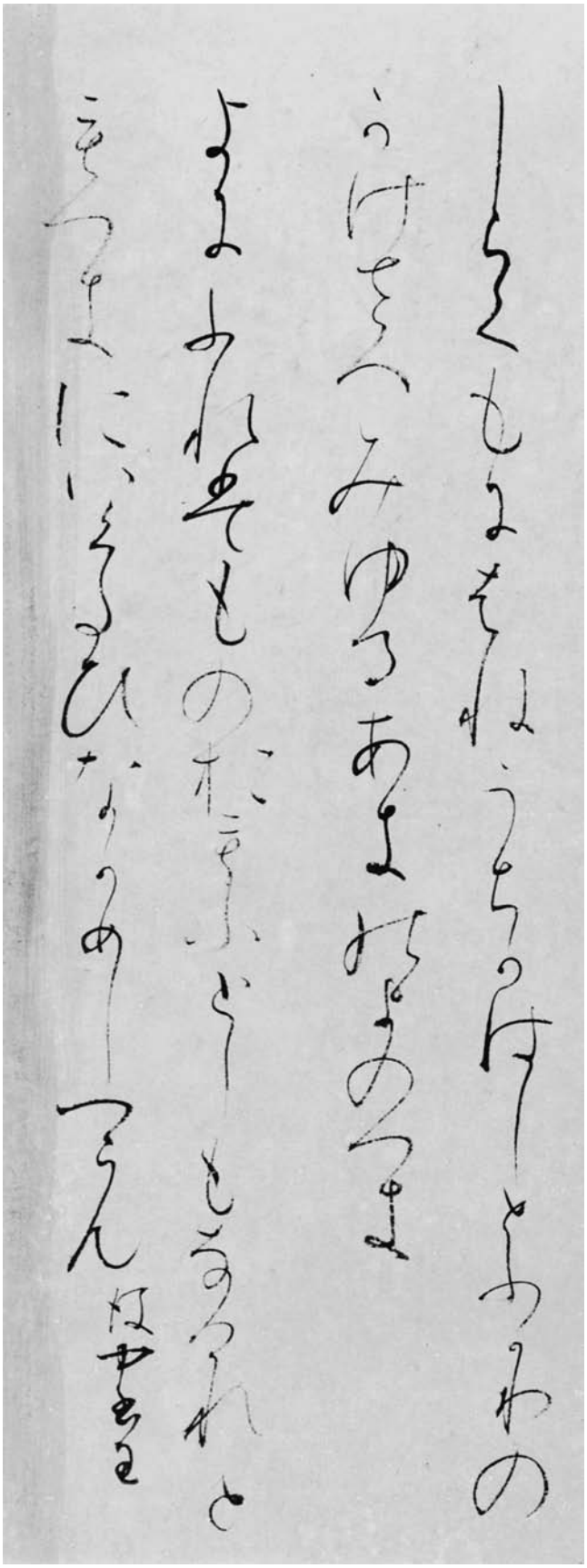


風雲而潤江海。斯皆紀乎／竹素。懸諸日月。既而仁獸／非時。鳴鳥弗至。哲人云逝

高野切第一種　かな部　第一種　半紙に写真掲載の和歌・二首を書く・それ以外は不可（料紙可）



あをやぎをかたいとによりてうぐひすの／ぬふといふかさはむめのはながさ
支乎可　尓　利　久　春　不　可　者　那
まがねふくきびのなかやまおびにせる／ほそたにがはのおとのさやけさ
可　不　久　支　奈　可　於　尓　世　留　曽　多　尓　可　於　介



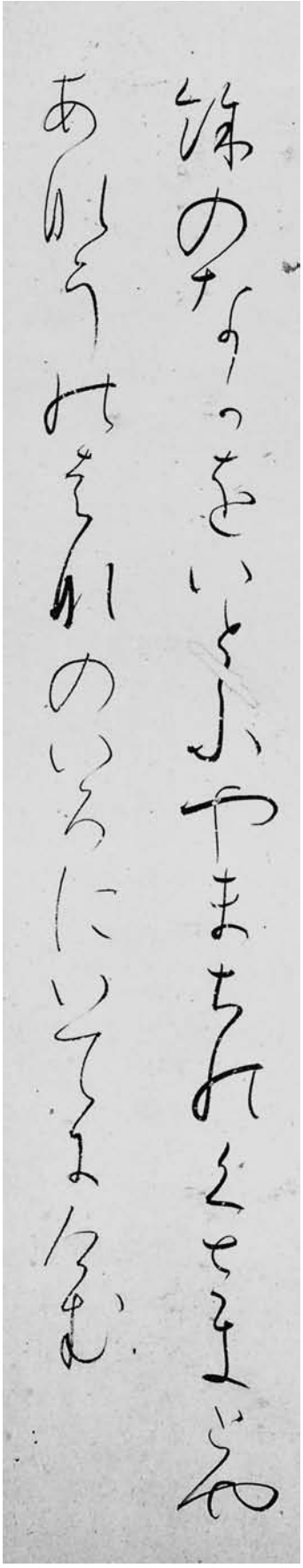
しらくもにはねうちかはしとぶかりの／かげさへみゆるあきのよのつき

よにふればものおもふとしもなけれど／もつきにいくたびながめしつらん後中書王

高野切第三種

かな条幅部

第三種　半切に写真掲載の和歌を書く・それ以外は不可（料紙可）



よのなかをいとふやまぢのくさきとや／あなうのはなのいろにいでにけむ

（餘可能久支那能者那尓介）

ご注意!!

名前のかき方

どの部も氏名または名、号を書く。
臨書は○○臨と書く。
印だけでは失格、特にかな・ペン字は注意のこと。

〈展覧会だより〉

◇田中扇溪・柳町祥香二人展

〝感じる書〟

会期　2011年9月9日(金)～11日(日)

会場　八戸市美術館3階

お知らせ

8月12日（金）～16日（火）

事務所は、夏季休業させていただきます。
よろしくお願いいたします。

(財)書道芸術院

※9月号の課題予告は45ページに記載。

表紙写真　「集字(王)聖教序」

出品券　9月15日締切